

Economic Monitor

所長 三輪裕範 03-3497-3675 miwa-y@itachu.co.jp
 主任研究員 丸山義正 03-3497-6284 maruyama-yo@itachu.co.jp

2012年の経常黒字は現行統計で過去最低に

2012年の経常黒字は4.7兆円と現行統計で過去最低、旧基準で見ても1982年以来の低水準。世界経済拡大や円安等を受けて所得収支は増加基調を維持も、高水準の輸入を反映し貿易赤字の縮小が見込めないため、経常収支は低空飛行が続き、2013年の黒字幅は更に縮小する可能性がある。

2012年の経常黒字は現行統計で最低

国際収支統計によると、2012年の経常黒字は4.7兆円と2011年の9.6兆円から半減し、円建てで経常収支が公表され始めた1985年以来の過去最低を更新した（従来の最低は1990年の6.5兆円）。また、ドル建て統計を当社が円換算したベースで見ても、1982年以来の低水準である（1982年は1.7兆円程度）。

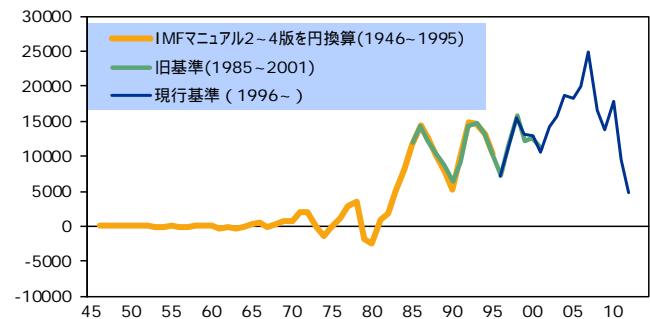
貿易赤字の拡大が寄与

2012年に経常黒字が縮小した原因是、貿易赤字の拡大である。経常黒字額の縮小幅4.8兆円に対し、貿易赤字（国際収支統計ベース）の拡大幅が4.2兆円に達し、ほとんどを占めている。貿易赤字は2012年に5.8兆円と2011年1.6兆円の3.5倍に膨らんだ。貿易赤字の拡大には、輸出と輸入が共に寄与している。世界経済の低空飛行と円高に加え、日中間のトラブルが響き、輸出額が前年比2.1%と落ち込んだ。一方、発電用燃料の輸入数量増加と価格上昇に加え、消費財の輸入浸透度上昇による輸入数量増加により、輸入額が4.5%と大幅に増加した。円高は輸入価格を押し下げ、輸入額を圧縮する方向に寄与したが、燃料については外貨建価格の上昇が円高の効果を上回り、また燃料以外についても輸入数量の増加により概ね相殺された¹。

所得収支は増勢維持も、サービス収支が悪化

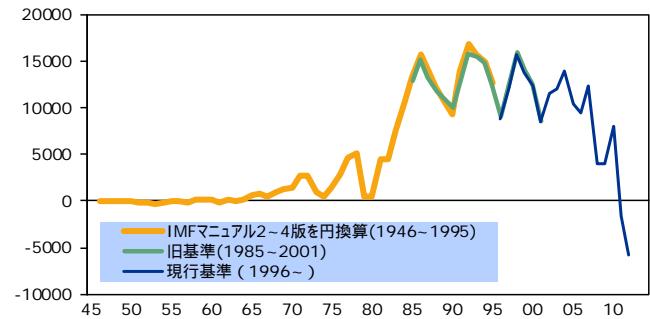
貿易収支以外では、所得収支が前年比1.6%（前年差1,206億円）と2年連続で増加、14.3兆円と金融危機後の最高を更新した（金融危機前の最高は2007年の16.5兆円）。世界的な低金利を受け債券利子収入が縮小し証券投資収益が減少したものの（配当金は増加）、直接投資収益の拡大により補われた。一方、サービス収支は赤字幅が2011年の1.8兆円から2.6兆円へ拡大した。旅行収支の赤字は縮小も（2011年1.3兆円2012年1.1兆円）、輸送収支の赤字が膨らみ（

経常収支の長期推移（10億円、1946～2012）



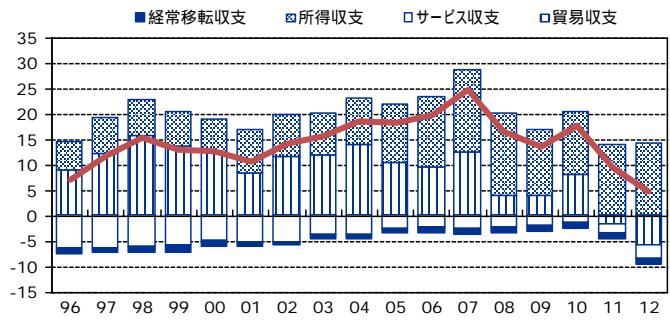
（出所）日本銀行

貿易収支の長期推移（10億円、1946～2012）



（出所）日本銀行

経常収支の推移（兆円、暦年）



（出所）財務省

¹ 貿易動向の詳細は1月28日付 Economic Monitor「2012年の貿易動向：輸出の仕向け地別分析と輸入の品目別分析」を参照。本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、伊藤忠経済研究所が信頼できると判断した情報に基づき作成しておりますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。記載内容は、伊藤忠商事ないしはその関連会社の投資方針と整合的であるとは限りません。

0.9兆円 1.3兆円) その他サービス収支が赤字に転落している(0.4兆円 0.3兆円) 日本企業の海外生産増加などを反映し特許等使用料(0.8兆円 1.0兆円)や工業権使用料(1.4兆円 1.5兆円)の黒字幅は拡大したものの、その他営利業務の収支が大幅に悪化している(0.0兆円 0.8兆円)。

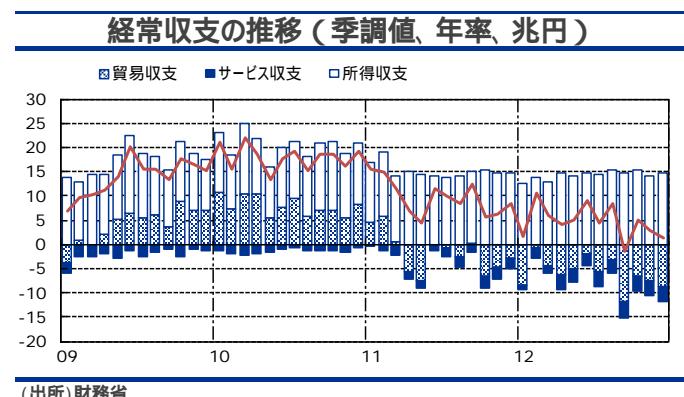
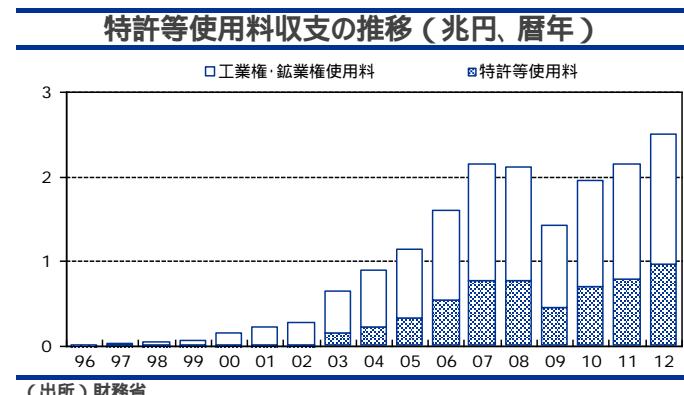
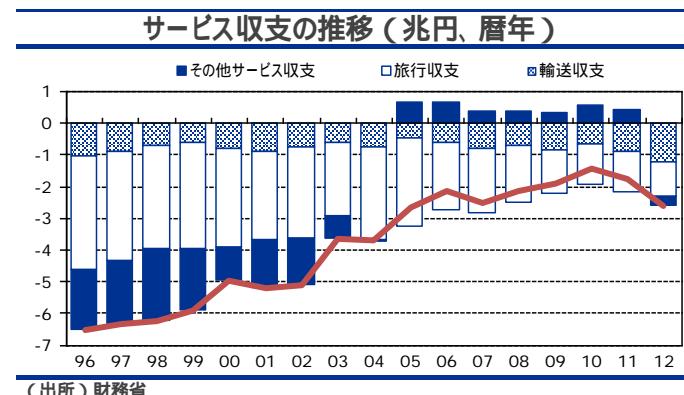
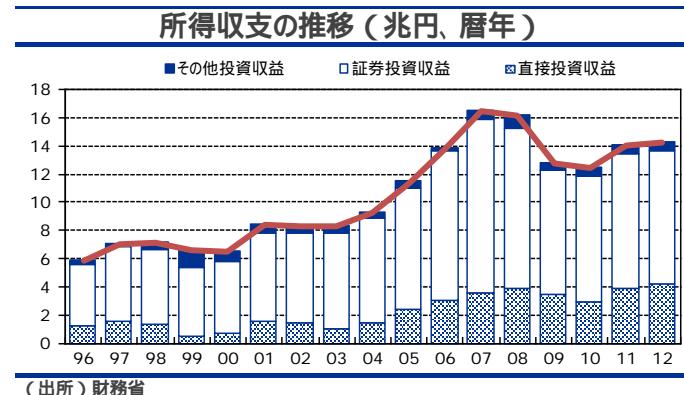
2012年12月の動向

2013年を展望する前に、直近2012年12月の経常収支動向を見ると、原系列は2,641億円と11月2,224億円に続き2ヶ月連続の赤字である。赤字転落は季節性によるところが大きく、季節調整値では981億円と黒字を確保しているものの、黒字幅は4~6月期平均の5千億円程度、7~9月期平均の3千億円強を明確に下回り、縮小傾向にある。但し、世界経済回復と円安により輸出が10月をボトムに11月前月比1.4%、12月0.4%と回復している点は好感される。

2013年の経常黒字は更に縮小

直近動向も踏まえつつ、2013年を展望すると、まず世界経済持ち直しや円安を受けて、輸出は回復へ向かう。しかし、原発が再稼働しない可能性が高いため発電用燃料輸入は高水準が変わらず、また2014年4月の消費税率引き上げ前の駆け込み需要が輸入を押し上げる。その結果、貿易赤字は2013年に幾分拡大が見込まれる。世界経済回復を受け、所得収支は直接投資収益や配当収入を主体に緩やかな増勢維持が予想される。また円安も所得収支の拡大をサポートする。サービス収支の先行きは予想が難しいが、高水準の輸入が続き輸送収支の大幅改善は期待できないため、2012年と同程度の赤字を想定する。

以上を踏まえれば、経常収支は2012年後半と同様の低空飛行が当面続き、2013年の経常黒字幅は2012年から幾分縮小する可能性が現時点では高い(但し、為替動向次第の部分も大)。なお、黒字幅が小さいため、環境税導入前の化石燃料駆け込み輸入により季節調整値で経常赤字に転落した昨年9月のように、月次で赤字に転落することは十分にありうる。また、原系列では、そもそも季節性として赤字になりやすい1月などに赤字転落する可能性は極めて高い。すなわち、2013年1月は3ヶ月連続の経常赤字が見込まれる²。



² 貿易統計によると、2013年1月上旬は1.1兆円の赤字だった。なお、赤字幅は前年の1.6兆円からは縮小した。